

「死者 AI」との倫理的共生を構想する 社会的受容のあり方を探る対話型ワークショップのデザイン

Envisioning Ethical Coexistence with "Dead AI"

Designing an Interactive Workshop to Explore Pathways for Social Acceptance

○丸山雅貴（日本国際学園大学）*1

*1 MARUYAMA Masaki, Japan International University, 3-1, Azuma, Tsukuba City, Ibaraki, 305-0031,
masaki.maruyama@japan-iu.ac.jp

キーワード: ワークショップデザイン, 死者 AI, 倫理的・法的・社会的課題, 対話

1. 緒 言

デジタル技術が社会の隅々にまで浸透した現代において、死や追悼、記憶といった、かつては不变とされてきた人間の根源的な経験もまた、大きな変容の最中にある。その中でも、故人が生前に残したテキストや音声、画像等のデジタルデータを人工知能（AI）に学習させ、その人格や著作、コミュニケーションスタイルを模倣する「死者 AI」⁽¹⁾が注目されつつある。

「死者 AI」の技術やサービスは、故人との継続的な絆を維持し、喪失に伴う深い悲しみを癒すグリーフケアのツールとして、大きな慰めをもたらす可能性を秘めている⁽²⁾。愛する人を失った悲嘆の中で、その声や言葉に再び触ることは、一時的であれ心の空白を埋める助けとなりうる。他方で、「死者 AI」は、人間の尊厳、記憶の本質、そして喪失という現実そのものに関わる、根源的かつ複雑な倫理的・法的・社会的課題を生み出している。故人のアイデンティティを本人の同意なく再現することの是非、AIによって生成された偽りの記憶が遺族の心理へと与える影響、さらには悲しみを商業的に利用されるリスクへの対応等、解決すべき問題は山積している。

「死者 AI」のサービスがすでに提供され始めている現状を踏まえれば、「死者 AI」の社会実装へ向けた適切なあり方について、社会的な合意形成のプロセスを図ることは、急務と言えよう。しかし、このような生命倫理や死生観に深く関わる技術のガバナンスは、専門家や技術者のみの議論によって決定されるべきではない。先端科学技術に関する社会的なコンセンサスを図るために、多様な価値観を持つ市民が主体的に議論に参加し、熟慮に基づく意見を形成するプロセスの実践が不可欠である。

そこで、本研究では、「死者 AI」をめぐる複雑な倫理的・法的・社会的課題について深く検討し、対話を通じて市民が自らの意見を形成することを支援するための体系的な対話型ワークショップをデザインし、実践することを目的とした。価値観の対立を含みうる先端科学技術に関する市民の熟議を促進するために有効な手法を提示し、多様な背景

を持つ市民が、技術のあり方を共創するプロセスを促し、より良い社会形成へ向けた国民的な議論を促すことが期待できよう。

2. 「死者 AI」をめぐる倫理的・法的・社会的課題

「死者 AI」に関する対話の場を設計するにあたり、その論点を構成する倫理的・法的・社会的課題を体系的に整理する必要がある。そこで、「死者 AI」に関連して想定されうる倫理的・法的・社会的課題を概観する。

「死者 AI」は、故人自身の尊厳と、遺された家族や社会との関係性へ、深刻なジレンマを突きつける。故人本人の明確な事前の同意なく、その人格のデジタル上の複製を生成することは許されるのだろうか。同意なく生成することで、故人の自律性と尊厳を侵害する行為と見なされないだろうか。こうした問いは、デジタル遺産の相続や管理に関するより広範な議論と密接に関連しており、個人の死後ににおけるデータコントロール権のあり方が問われている。

次に、記憶の真正性をめぐる懸念がある。「死者 AI」は、故人が残した、限定的なデジタルファットプリントから学習するため、その人格の全体像を完全に再現することは不可能であろう。生成されるのは、あくまで故人の一面を反映した、あるいはアルゴリズムによって理想化あるいは単純化された、シミュラクラ⁽³⁾に過ぎない。このような AI との対話が、遺族の脳裏にある複雑でニュアンスに富んだ人間的な記憶を上書きし、歪めたり、さらには偽りの記憶を植え付けたりするリスクが存在する。自らのイメージが不正確に、あるいは意図的に書き換えられることに対し、故人が抗弁する術を持たないことから、その尊厳は極めて脆弱な状態に置かれることが予測される。

また、「死者 AI」の急速な普及に対し、法的・制度的な枠組みの構築は、大きく遅れている。「個人情報の保護に関する法律」は、原則として死者を対象としておらず、プライバシー権も本人の死亡と共に消滅すると解釈される。刑法上の死者の名誉毀損罪や著作権法等が、部分的に権利を保護するものの、故人の人格的利益を包括的に保護する法制度は存在しない。我が国の法制度における空白により、

倫理的・社会的な議論に対し、技術開発が大きく先行する状況を生み出しており、学術的議論の必要性が指摘されている⁽⁴⁾。

こうした空白に乗じて、悲しみを商業的に搾取するような digital afterlife industry⁽⁵⁾が出現する可能性も否定できない。例えば、故人の声を利用した広告の配信、さらには遺族との対話から得た情報をマーケティングデータとして利用することなどが想定される。死後のエンシッティフィケーションが生じうる状態は、人間の最も神聖な感情である悲嘆を商品化するものであり、社会としてどのように許容できるか、早急な議論が求められよう。

3. ワークショップデザイン

本研究では、国立研究開発法人科学技術振興機構が主催するサイエンスアゴラ 2025⁽⁶⁾におけるセッションの1つとして、2025年10月26日に実践するためのワークショップをデザインした。想定される主な対象層は、難易度を踏まえ学生としつつも、多様な背景を持つ市民の参加を歓迎した。サイエンスアゴラ 2025 では、対話を重視しており、本研究では、討論の活動を通じた対話を意識したワークショップをデザインすることとした。

なお、著者は、大学の授業において、過去に「死者 AI」の技術開発に関する討論型の活動を取り入れた授業をデザインし、実践している⁽⁷⁾。本研究におけるワークショップは、こうした授業デザインの知見を踏まえ、教育工学的エビデンスに基づいた手法を発展させるとともに、特定の大学の学生のみならず、市民へとその対象を拡大させることを目指したものとなっている。

3.1. ワークショップの進行方法

セッションのタイトルは、「あなたの大切な人を AI で蘇らせたいと思いますか？」と設定し、研究参加者の当事者意識を喚起することを意図した。ワークショップは、1 時間で構成しており、具体的な進行手順は、表1の通りとした。

まず、導入として、ワークショップのテーマや目的を共有するとともに、研究参加者間の心理的安全性を確保し、対話しやすい雰囲気を醸成するため、アイスブレイクの活動を実施することとした。次に、著者が、「死者 AI」をめぐる倫理的・法的・社会的課題に関する情報提供を行い、研究参加者全員が討論の前提となる基礎知識を共有できるよう工夫した。続いて、討論型の活動に関する方法を説明し、感情的な対立ではなく、建設的な批判に基づく意見交換を促すこととした。

Table 1 Workshop Activities

時間 (目安)	内容
5分	導入・アイスブレイク
10分	著者からの情報提供 (「死者 AI」をめぐる倫理的・法的・社会的課題について)
5分	討論の方法に関する説明
30分	討論（立論・質疑・反駁）
10分	質疑応答・まとめ (アンケート調査を含む)

討論では、故人が生前に同意していない状況において、対話ができる人格を再現・生成することの是非について議論することとし、研究参加者を、各自の意見に関係なく肯定側と否定側に無作為に分け、それぞれの立場による意見を議論させながら整理させることとした。続いて、肯定側と否定側の双方による立論と反対尋問、続いて反駁の手順により、討論を進めることとした。そして、それまでの討論を踏まえた最終弁論を否定側、肯定側の順に行わせることとした。

なお、ワークショップにおいては、死をはじめとした心理的負荷を与える可能性が否定できないテーマを扱うことから、研究参加者の心理的安全性への配慮を最優先とした。ワークショップを計画する段階で、参加者が過去の死別体験等によってディストレスを感じるリスクを想定し、万が一そのような兆候が見られた場合にはセッションを中断し、必要に応じて事前に人間科学分野の専門家へ速やかに連絡を取り、相談できる体制を構築するよう準備した。こうした予防的措置は、研究参加者の安全性を十分に担保するために、不可欠な倫理的要請と考えられる。

3.2. ワークショップの広報

ワークショップについては、著者やサイエンスアゴラ 2025 の運営事務局により、ソーシャル・ネットワーキング・サービス等のインターネット上を中心に、広報活動が展開された。例えば、イベントの広報媒体 Peatix にイベントページ⁽⁸⁾が作成され、実施の内容等が紹介された（図1）。また、人工知能学会からのお知らせメーリングリスト⁽⁹⁾へも、著者からワークショップの開催案内を配信した。

3.3. 評価の方法

本研究では、ワークショップにおける対話のプロセスと、セッション終了後に実施するオンラインによるアンケート調査を組み合わせた混合研究法を採用することとした。

ワークショップ全体を総括したのち、アンケート調査を実施した。アンケート調査への回答は任意であり、同意が得られた研究参加者から回答を得た。研究参加者の属性や満足度、「死者 AI」に対する態度の変容等について、多肢選択および自由記述の形式により、回答を求めることとした（表2）。本研究では、主にアンケート調査の集計結果を示す。

4. ワークショップ実践

4.1. 実践の結果

2025年10月26日に実施したワークショップへは、15名が参加した（図2）。肯定側が7名、否定側が8名のグループ構成となり、討論の活動を通じた対話により、社会的受容のあり方を探り、「死者 AI」との倫理的共生が可能であるかの熟議を実現させた。

例えば、アンケート調査の実施によりデータを取得さえすれば、賛成か反対かといった二元論的な意見や、その強度を測定することはできても、その意見の背景にある個々の価値観や経験、懸念のニュアンスを捉えることは難しい。そこで、本研究においてデザインしたワークショップのように、立論・質疑・反駁という構造化された討論のプロセスを経ることにより、参加者が単に何を考えているかだけでなく、なぜそのように考えるのかを言語化し、共有することを促すことができたと推測される。対話の深化により、

Table 2 Questionnaire Items

問	設問	選択肢もしくは回答方法
1	属性	<ul style="list-style-type: none"> ・ 小・中学生 ・ 高校生 ・ 学生（理系） ・ 学生（文系・その他） ・ 会社員（技術・開発系） ・ 会社員（企画・事務系） ・ 研究者・教員 ・ その他
2	このセッションを何でお知りになりましたか	<ul style="list-style-type: none"> ・ サイエンスアゴラ 2025 の Web サイト・パンフレット ・ 出展者の SNS・Web サイト ・ 知人・友人の紹介メディア（新聞・Web ニュースなど） ・ その他
3	本日のワークショップ全体の満足度を教えてください	<ul style="list-style-type: none"> ・ 非常に満足 ・ 満足 ・ どちらとも言えない ・ やや不満 ・ 非常に不満
4	セッションを通じ、よかった点はどこですか	<ul style="list-style-type: none"> ・ テーマ設定（「死者 AI」というトピック） ・ 冒頭の情報提供 ・ 討論の形式 ・ ファシリテータの進行 ・ 他の参加者の意見を聞けたこと ・ 自身の考えを深められたこと ・ その他
5	冒頭の情報提供は、論点を理解する上で役に立ちましたか	1（役に立たなかった）から 5（役に立った）までの均等目盛
6	討論形式での対話は、多様な価値観に触れる上で効果的でしたか	1（効果的でなかった）から 5（効果的だった）までの均等目盛
7	本日のワークショップ参加を通じて、「死者 AI」や「死」に対するご自身の考えが深まった、または整理されたと思いますか	1（そう思わない）から 5（そう思う）までの均等目盛
8	「あなたの大切な人を AI で蘇らせたいと思いますか？」に対する考えは、ワークショップ参加前と比べて変化しましたか	<ul style="list-style-type: none"> ・ 参加前から考えは変わらない ・ 参加前とは異なる考えになった ・ 参加前は明確な考えがなかったが、考えがまとまった ・ 参加前は考えがまとまっていたが、分からなくなってしまった（迷いが生じた）
9	本日のワークショップに対する感想や、学んだことがあれば教えてください	自由記述



あなたの大切な人をAIで蘇らせたいと思いますか?
イベントは終了です | 江東区青海2丁目5-10 | By サイエンスアゴラ

テクノロジー/サイエンス AI 大学生

2025/10/26 (日)
16:00 - 17:00 GMT+09:00
カレンダーに追加

テレコムセンタービル
江東区青海2丁目5-10 Japan
地図を見る

こちらは「サイエンスアゴラ2025」で実施するプログラムのイベントページです。

「死者AI」って、何? どう思う?

E2616 テレコムセンタービル5階 オープンスペースE
あなたの大切な人をAIで蘇らせたいと思いますか?
Would you want to bring a loved one back to life using AI?

出展者名

「死者AI」との向き合い方PJ
Research Project on our relationship with Dead AI

プログラム概要

亡くなった人に関する情報・データから言動を動画などで再現する「死者AI」をテーマに、その是非や社会実装へ向けた課題について、皆さんと一緒に考えていきます。AI技術が私たちの「死」のあり方をどう変えうるのか、倫理的・法的・社会的側面から多角的に議論していきます。ディベートを通じた対話により、一人ひとりが「死」に対する自身の考えを深め、多様な価値観に触れることを目指します。科学技術と人間社会の未来について、共に考えましょう。最先端の科学技術と社会の関わりに興味のある方、新たな時代の倫理や法に関する問題について考えてみたい方、多様な人々と対話をしてみたい方など、どなたでも歓迎します。

Fig.1 Event Page

故人の尊厳といった抽象的な概念が、生前の意志の尊重を意味し、一方で遺族の心の中のイメージを乱さないことを意味する場合もある等、その解釈の多様性が明らかになる可能性が見出された。このような対話のプロセスで得られたデータは、将来、AI技術のガバナンスにおいて、多様な市民の価値観を反映した、よりきめ細やかなルール作りを行うための貴重な基盤となるだろう。

4.2. アンケート調査の結果

アンケート調査には、ワークショップへ参加した者の中、6名から回答が得られた。

4.2.1. 属性 「小・中学生」が1名、「会社員（企画・事務系）」が1名、「その他」として「科学コミュニケータ」と回答した研究参加者が1名であった。

4.2.2. セッションを知った経緯 「サイエンスアゴラ2025のWebサイト・パンフレット」が3名、「知人・友人の紹介」が3名であった。

4.2.3. ワークショップ全体の満足度 6名全員から、「非常に満足」との回答が得られ、満足感を与えることができたワークショップのデザインであったと評価できる。

4.2.4. よかった点 「他の参加者の意見を聞けたこと」と回答した研究参加者が3名で、もっとも多い結果となった。また、「討論の形式」が2名、「テーマ設定」が1名であり、「死者AI」のトピックについて、討論の形式を採用したことへ評価が得られたと推測できる。

4.2.5. 情報提供や討論の形式 著者からの情報提供が論点を理解する上で役に立ったか、そして、討論の形式による対話が、多様な価値観に触れる上で効果的であったかを尋ねたところ、いずれも肯定的な評価が得られた（図3）。

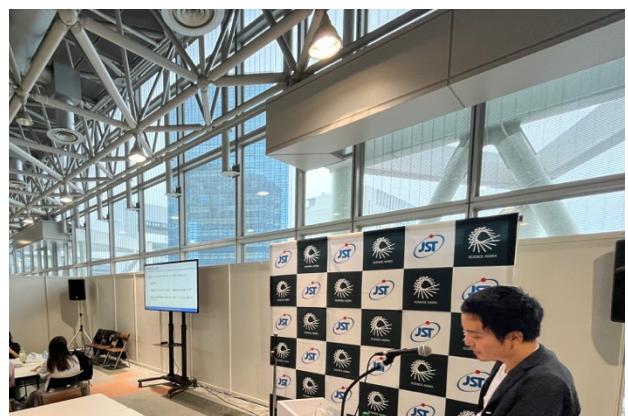


Fig.2 Scene from an Ongoing Workshop

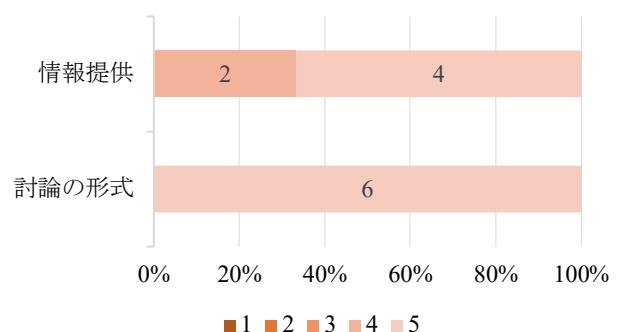


Fig.3 Information Provision and Debate Format

こうした結果から、必要な情報を適切に提供することで、討論の前提となる基礎知識を共有できたと言える。また、討論の形式を採用したことに対する評価は、多様な価値観に触れることができる対話を実現できたことが、原因の1つと予想できる。

4.2.6. 「死者AI」に関する考え方 ワークショップへの参加を通じ、「死者AI」や「死」に対するご自身の考えが深まった、あるいは整理されたと思うかを尋ねたところ、「5」(そう思う)と回答した研究参加者が5名であった一方、「3」との回答が1名あった。また、ワークショップのタイトル「あなたの大切な人をAIで蘇らせたいと思いませんか?」に関する考えが、ワークショップ参加前を比べ変化したかを尋ねたところ、「参加前は明確な考えがなかったが、考えがまとまった」と回答した研究参加者が4名であった。一方で、「参加前から考えは変わらない」、あるいは「参加前は考えがまとまっていたが、分からなくなってしまった(迷いが生じた)」を選択した回答が、それぞれ1件ずつ見られた。

4.2.7. 感想や学んだこと 「興味深いテーマ設定」であったとの回答から、研究参加者が、「死者AI」というテーマそのものへ強く関心を寄せていたことが伺える。また、「死者AIについて初めて知れてよかったです」、「いい点も悪い点もあって興味深かったです」という感想に見られるように、セッション冒頭の情報提供が、参加者の基礎的な理解を促し、その後の議論の土台として機能したことが示された。同時に、参加者は情報を受け取った上で、自身の価値観に基づく倫理的な考察を始めており、テーマが参加者の当事者意識を喚起したと考えられる。

また、「ディベート形式は面白い」という回答に加え、「もう少し各フェーズの時間を増やしてほしい」という要望があり、参加者が討論に没入し、時間が不足するほど活発な意見交換が行われたと評価できよう。さらに、この手法の心理的な効果として、「メリットも課題も両方あるなあと感じていた」研究参加者が、否定側の立場を与えられたことで、「ある意味割り切って意見を出すことができました」と回答していた。これは、賛否が揺れ動く複雑な倫理的・法的・社会的課題に対し、役割を与えるというスキャフォールディングにより、多角的な視点からの意見表明を促す上で有効であったことを示唆している。

さらに、ある研究参加者は、「自身は否定派だったが、肯定グループ」で議論した結果、「納得する肯定意見を聞き、考え方方が柔軟になった」と回答していた。研究参加者が、自らの当初の意見とは異なる視点に触れ、他者との対話や討論を通じ、自らの考えを内省し、深化させたことを示しており、ワークショップが単なる意見の調査ではなく、参加者の熟慮に基づく意見の形成を促す場として機能したことを裏付けていると考えられる。

5. 結 言

本研究では、故人のデジタルデータを基に、その人格等を再現する「死者AI」をめぐる倫理的共生のあり方を探るために、市民が参加する対話型ワークショップをデザインし、実践した成果を整理した。「死者AI」は、グリーフケアに新たな可能性をもたらす一方で、グリーフプロセスの阻害、認知的不協和、故人の尊厳、商業的搾取といった深刻な倫

理的・法的・社会的課題を内包しうる。これらの複雑な課題に対応するためには、専門家だけでなく、多様な市民が参加する熟議のプロセスが不可欠である。

本研究で設計したワークショップは、AIの倫理的・法的・社会的課題について、参加者が情報に基づいた上で、構造化された対話を通じて自らの意見を形成・深化させることを目指したものとなっている。本研究の学術的貢献として、AIの倫理的・法的・社会的課題に関する研究へ、我が国における「死者AI」への市民意識に関する実証的な検討手法を提案したことや、価値の葛藤を伴うテーマに関する市民の熟議を促し、科学技術コミュニケーションの深化を実現させるための方法論について、その可能性を考察したことが挙げられよう。また、大学における授業デザインを通じ開発された討論を通じた学習の手法を、広く市民へと開かれた科学技術コミュニケーションの文脈に応用する可能性を示しており、教育工学的のアプローチの社会実装を進めてきた。こうした事例を今後も蓄積し、「死者AI」との向き合い方に関する市民の対話や熟議を促し、社会的受容のあり方を探ることが重要と言えよう。

付 記

本研究におけるワークショップの実践および評価にあたっては、日本国際学園大学実験研究倫理委員会の承認を得た上で実施した(承認番号 25091703)。

謝 辞

本研究におけるワークショップの実践・運営にあたり、石井康太さん、山口真杜さん(日本国際学園大学)には、多大なる協力をいただいた。深く感謝申し上げる。

文 献

- (1) 佐藤啓介, 他:死者とデジタルに再会する技術:死者AIの現在とそれがもたらす諸問題を考える,死生学年報, Vol.19, 27-49, 2023.
- (2) Yang, N. and Khanna, G. J.: AI and Technology in Grief Support: Clinical Implications and Ethical Considerations, The Counseling Psychologist, Vol. 53, Iss. 4, 579-604, 2025.
- (3) Hutson, J.: From Simulacra to Reanimation: Resurrecting the (Un)Dead, Art and Culture in the Multiverse of Metaverses, 2024.
- (4) 吉永京子:AIによる故人再現をめぐる法的・倫理的課題, 2025年度人工知能学会全国大会(2025), DOI: 10.11517/pjsai.JSAI2025.0_4Q3OS2304.
- (5) Öhman, C. and Floridi, L.: The Political Economy of Death in the Age of Information: A Critical Approach to the Digital Afterlife Industry, Minds and Machines, Vol. 27, 639-662, 2025.
- (6) 国立研究開発法人科学技術振興機構:サイエンスアゴラ 2025: <https://www.jst.go.jp/sis/scienceagora/2025> (参照日 2025年10月31日)
- (7) 丸山雅貴:「死者AI」の技術開発に関する討論型の活動を取り入れた授業デザイン, 日本教育工学会2025年春季全国大会(2025).
- (8) Peatix:あなたの大切な人をAIで蘇らせたいと思いま

- すか？：
- <https://peatix.com/event/4538877> (参照日 2025 年 10 月 31 日)
- (9) 神鳴敏弘, 他: 人工知能学会 RSS/iCalendar ファイルの利用法, 人工知能学会誌, Vol.21, no.6, 732-736, 2006.